

牧野田恵美子教授のご定年を迎えて

社会福祉学科 学科長 幸 津 國 生

牧野田恵美子教授が本年3月末をもってご定年退職を迎えられる。本学には1988年4月当時の文学部社会福祉学科助教授に就任されて以来、16年間ご在職された（その間、改組によって1995年4月人間社会学部社会福祉学科助教授となられ、1998年4月同教授に昇任された）。本学科では、社会福祉援助技術の中で、とりわけ精神科ソーシャルワークを担当してこられた。

精神科ソーシャルワーカーとしての永年の現場でのご経験とそれに基づいたご研究とを学科および大学院の教育に生かしてこられた。実践に必要とするものを学生・院生が地に着いたものとして身に付け、現場での仕事に耐えられるように彼女らを鍛えていくこと、このための学科の体制づくりに大きな貢献をしてくださった。

精神保健福祉士受験資格を本学科での取得資格とするための課程認可に際しては主たる担当教員としてお力を尽くしてくださった。このことによって学生の取得資格選択の幅が広がった結果、学生の学習の目標はより明確となり、対外的にも本学科の教育の充実を示すことができた。この成果は、社会福祉実習報告会とは別に精神保健福祉実習報告会が学科全体の取り組みとして活発に行われるようになったこと、またそのような取組みを前提として社会福祉実習報告集とは独立に精神保健福祉実習報告集が出されるようになったことに示されている。

学科のこのような取り組み際しては、教授は常に率先して学科を導いてくださった。教授のご努力によって、多くの有望な後進が輩出しているのは頼もしい限りである。精神保健福祉は社会福祉の個別領域の中でも社会的に見て最も困難な問題を抱えている領域であると思われるが、今後本学科および出身者がこの領域でも積極的に活動し発言していくときに、教授の残された成果はこれからも確かな出発点になるであろう。これまでのご尽力に心からお礼申し上げます。

ところで教授は、知る人ぞ知る二つの特技をお持ちである。一つはヨガの実践（折にふれてのヨガのお話、また新入生歓迎セミナーなどの機会にはその一端を垣間見させていただいた）であり、もう一つは茶道の実践である。ヨガと茶道とは社会福祉には一見つながりがないと思われるかもしれない。しかし、実はこれらは人間の立ち居振る舞いの根本に関わっているものであり、社会福祉もこのような根本から生じてきたものと考えることができよう。教授にはこれからは学科の将来を見守っていただくことをお願いするとともに、特技を発揮されてのますますのご健勝をお祈り申し上げます。